



みんなの「なんなの?」を伝えるこども記者のための新聞(毎月1回発行)

信 毎 こ ども 記 者 ニ ュ ー ス



発行/連絡先

こども記者クラブ(信濃毎日新聞地域活動部) 〒380-8546 長野市南県町657
TEL 026-236-3110 FAX 026-236-3193 電子メール t-chiiki@shinmai.co.jp

no.48

信毎こども記者クラブは5月12日、下伊那郡阿智村にオープンしたばかりの「満蒙開拓平和記念館」で、取材教室「満蒙開拓の歴史」編を開きました。今から70年ほど前の戦争の時代、今の中国東北部に日本がつくった「満州」という国に長野県からも多くの人があつた、大変な苦勞をしました。そうした歴史と、実際に14歳で満州にわたった久保田諫さん(83)=下伊那郡豊丘村=から聞いた体験を、こども記者たちが力を合わせて伝えます。

満蒙開拓の歴史

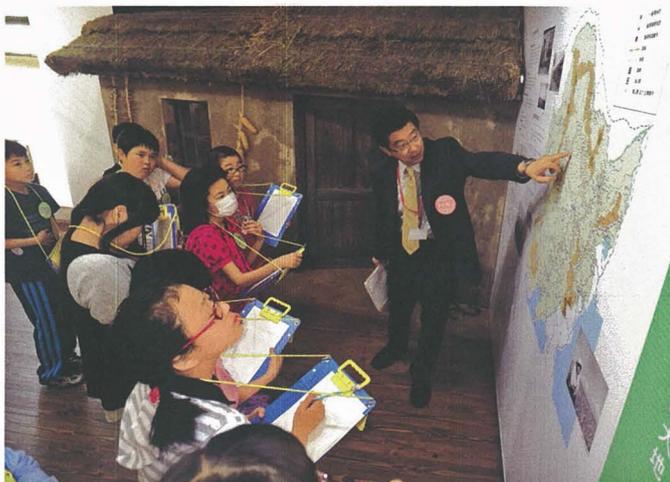
語り継ぐ



満蒙開拓平和記念館



満州にわたった人の服です



満蒙開拓の歴史を、記念館の展示を見ながら学んだよ

満州移民の歴史忘れない

三輪春奈記者

飯田市5年

満州には、日本全国から27万人が開拓団としてわたりました。そして国が安く、半強制的に買った土地や家で、はじめのうちは平和に暮らしていたといえます。



しかし、戦争が終わる直前の1945(昭和20)年8月9日、満州にとなり合うソ連(当時)の軍隊が突然、満州に攻めてきました。そのとき、満州を守ってきた日本の関東軍は、満州の4分の3の地域を放棄する作戦を立て、ソ連軍がやってくるように橋や鉄道も壊していったそうです。

そうした中に取り残された開拓団の人たちは、逃げるにも川を渡ったりしなければならぬ大変な苦勞をしました。多くの人々が亡くなったり、家族と生き別れてしまったりした子どもも大勢いて、戦争が終わった後も長く帰ることができない人もいました。

私は、こわいとか、悲しいとかを通りこした出来事を起こしてしまう戦争は、絶対によくないと思います。そのためにも、満州移民や開拓団のことを忘れずに、しっかり覚えておきたいと思います。

園原優宇人記者(阿智村5年)



満州は今の中国のことです。戦争の時代、日本の人たちが満州に行かなければならなかったのは、戦争のときに必要な食料を作るためでもあったそうです。

矢口駿太郎記者(松本市5年)



満州には長野県から3万3000人(都道府県別で最多)がわたりました。ぼくは日本の関東軍が多く開拓団を置き去りにしてしまったことがひどいと思いました。

岡庭蓮記者(阿智村6年)



久保田さんから思い出すのもつらい体験を聞かせていただきました。聞いているうちに背筋がぞくぞくし、戦争はあつてはならないということが一番心に残りました。

吉川桃加記者(阿智村5年)



記念館では、満州での暮らしをうつした映像や、再現された満州の家を見ることができ、初めての人でもよく分かります。満州に行った人の服もあつて、びっくりしました。

渡辺梢記者(阿智村5年)



記念館の展示を見て、いろいろなことが分かりました。記念館のノートにも「戦争は、やらないようにしたほうがよいと思いました」と書きました。



取材中はみんな真剣



こども記者から久保田さんに質問も



平和の時代が続くように

根岸優花記者

飯田市6年

14歳で満州にわたった久保田さんは、満州では日本にいたときよりもおなかがいっぱいに食べられたそうです。しかし、1945(昭和20)年8月15日に日本が戦争に負けたときから、そうした穏やかな暮らしは終わりました。日本に土地を奪われたりしたことへの反発から中国の人びとが暴動を起こし、開拓団として満州にわたった日本の人たちは昼間に道を歩くことも危険でできなくなってしまったそうです。



久保田さんの開拓団では、男の人たちは戦争に行き、主に女の人や子どもたちが残されました。日本が戦争に負けたことを知って、「ここで死んでも同じ」ということになって、みんなでも自ら命を絶つ「集団自決」をしたのです。73人という多くの人が亡くなって、そのうち40人以上が子どもだったそうです。

戦争の時代の日本は「満州に行けば多くの土地があつて豊かになれる」と言つて、満州に多くの開拓団を送りました。でも、人が亡くなることは、土地がないことよりも苦痛です。私は、この悲劇を語り継ぎ、平和が続いていくようにしていきたいです。